

仏教の平和思想とSGI

前川健一

一 SGIの平和理念

SGI(創価学会インタナショナル)の大きな目的の一つは、世界平和の実現である。それは、SGIの目的を定めたSGI憲章(Charter of the Soka Gakkai International)に以下のようにあるとおりでである。

我ら創価学会インタナショナル(以下、「SGI」という)の全ての構成団体及び構成員は、仏法を基調とする、平和・文化・教育への貢献を目指してゆ

と述べられているが、ここで言われている、「人間の交流」(英語版では、Grass-roots exchange、草の根レベルでの交流)、具体的には、メンバーによる対話運動こそが、SGIの主要活動であり、最も有効な手段と理解されている。すなわち、対話を通じての相互理解の増進・内なる善性の触発こそが、一見派手な社会的活動以上に、平和へと寄与しうるものと考えられているのである。

こうした活動の基盤になっているのは、日蓮の仏法であるが、「憲章」ではそれについて次のように述べている。

日蓮大聖人の仏法は、人間生命の限りなき尊敬性を説き、全ての人を包容する慈悲といかなる困難をも克服する智慧をもたらす法である。そして、この智慧は人間精神の創造性を拓き、人類社会の

く。

世界平和実現のためのSGIの具体的な活動としては、池田SGI会長による平和提言の発表、国連や関連機関と協力しての諸活動——たとえば、「地球憲章」の推進、「核の脅威展」などの啓発活動——が挙げられるであろうが、何よりメンバーによる地道な啓蒙活動こそが、平和へと寄与していくと考えられている。憲章では、目的の第四項として

直面するいかなる危機をも克服し、平和で豊かな共生の人類社会を実現できることを説く、「人間主義」の法である。

すなわち、日蓮仏法の特質として、「人間生命の限りなき尊敬性」(infinite respect for the sanctity of life)と「全ての人を包容する慈悲」(all-encompassing compassion)という二点を挙げている。先に挙げた、「人間の交流」(Grass-roots exchange)と併せて、この三点が、SGIの平和運動を特徴づけるものと言ってよいであろう。もともと、これらの視点は、日蓮仏法に淵源を持つものではあるが、広く仏教一般に見られるものである。それ故、SGIの平和思想・運動を考察するにあたって、仏教思想の観点から考察することは不可欠であるが、それだけでは不十分であることも明らかである。というのは、釈尊以後の仏教の歴史に於いても、あるいは日蓮以後の歴史に於いても、SGIのように国際的なレベルで民衆に根付いた運動は存在しなかったからである。そこで、SGIの理念の背景となっている特有

の歴史的状況についても目を向ける必要がある。それは、日蓮思想が国家主義と不可分に結びついたという近代日本特有の事情である。SGIの平和運動は、そうした偏狭な日蓮解釈からの解放という側面を持つている。以下、日蓮の平和思想、近代日本における日蓮解釈という順序で考察し、SGIの思想的基盤を探ってみたい。

二 日蓮の平和思想

仏教では、慈悲を仏教修行者の重要な徳目と考え、不殺生を重視している。これらは当然平和を志向するものである。もともと、仏教は伝統的に出家者の宗教であり、社会への積極的な関わりは修行論の上で必ずしも大きなウエイトを占めていない。むしろ、社会と距離を取ることによって、自らの思想的自由を確保しようとする傾向が強かったと言える。ナーガールジュナの『ラトナーヴァリー（宝行王正論）』のように、理想的な社会秩序についての思想が、仏教にないわけではないが、それは実践の中核とは見なされていなかった。

ヨハン・ガルトゥングによる以下のような判断はきわめて妥当なものである。「社会生活に貢献できるかもしれない個人を、社会生活から離れた悟りの状態への道程においてしまうため、マクロな社会への影響力は非常に小さいか、消極的でさえある」「仏教は、国の指導者が信仰の自由を認める見返りとして、彼らが仏教の「反対のものを実践することを容易に受け入れてしまうであろう」（高村忠成訳『仏教——調和と平和を求めて』、東洋哲学研究所、五七頁。原文の傍点は省略した）。

このような仏教一般の姿勢からすると、日蓮の思想は突出している。日蓮の思想と実践の特徴は、「立正安国」という言葉で示される。これは、為政者が正しい宗教を受容することで理想的な社会秩序が出現することを意味している。個人としての救済だけでなく、社会全体としての理想の実現を目指すという点に、日蓮の仏教思想の特色がある。¹⁾

このような日蓮の思想を考えるにあたっては、彼が活躍した時代状況を考えることが不可欠であろう。日蓮が活動した時代は、自然災害が頻発し、多くの人々

が犠牲になっていた。さらにまた、政治的な権力闘争も激化していた。日蓮は『立正安国論』に於いて、こうした様々な問題を起す根元は、誤った宗教に対する信仰であると考え、それを禁圧すること（具体的には、金銭的援助の撤廃）を為政者に進言するとともに、それを行なえば国内での内乱（自界叛逆）と外国よりの侵略（他国侵逼難）が起ると予言したのである。

日蓮が自らの理想実現の武器としたのが、対話の力であった。彼が為政者に要求したものは、敵対する諸宗派との公開討論であった。文証・理証・現証によって、自らの主張を納得させることができるというのが、彼の確信であった。ここには、理性的な討論によって正邪を決しようという彼の姿勢が反映していると言える。

日蓮が対話重視の姿勢をとったことは、grass-roots exchangeを重視するSGI運動においてしばしばモデルとされている。しかし、そこには、若干のアクセントの移動があることも指摘しておかなければならない。日蓮における対話（問答）は、「勝負」として考えられ

ており、問答を通じてお互いの主張の優劣を明確化することに重点が置かれている。すなわち、相互の差異を認め合うというよりは、単一の「正しい」結論があることを想定し、そこに向けて相互に論駁を行っていくというものと言えよう。これに対し、池田SGI会長は、日蓮の対話観をも視野に入れつつ、より今日的な課題の上から、対話そのものが相互理解を促進することを重視している。「誤解を恐れずにいえば、対話によって得られる結果以上に、『対話のプロセスそのもの』に、対話の真価があるとさえいえるでしょう」（ベック・P・ナンダとの対談集『インドの精神』、東洋哲学研究所、三七二頁）。

また、日蓮は、自らの信じる「正法」が多くの人に信仰され、やがて全世界（「一閻浮提」）に広まることを確信していた。このことは、SGIが全世界にメンバーを拡大していく上で、大きな励みとなっている。しかし、「正法」の信仰・拡大がいかにして平和な社会をもたらしかについての彼の説明は、今日では必ずしも十分なものとは言えないであろう。²⁾ 日蓮は、個々の信

徒に対する指導では、細かい生活上のアドバイスをし
ており、その意味で現実的な配慮を持った人物であつ
たことを示しているが、理想社会の建設というマクロ
なレベルで、どのような施策が必要なのかは必ずしも
明らかではない。後に見るように、SGI運動では、
この点に於いて新たな展開を示していると言つてよい
であらう。

三 近代の「日蓮主義」とSGI

日蓮は、既成の宗派やそれと結びついた政治権力を
厳しく批判したため、激しい迫害にあつた。彼を祖と
する教団は、その後も同じ運命をたどつた。近世に於
いて江戸幕府による強力な宗教統制が行われると、大
多数は政治権力と妥協的な姿勢を取り、ごく一部は妥
協を拒否して禁圧され地下信仰と化した。

明治維新後の新政府は、神道にもとづき、天皇を国
家の支柱としたため、日蓮宗は自らの有用性を示すた
め新たな展開を必要としていた。これに応えたのが、
田中智学による「日蓮主義」である。⁽³⁾

にもとづく社会貢献の重要性を強調するとともに、「地
球民族主義」をとまえ、偏狭な国家主義を批判した。
また、「原水爆禁止宣言」(一九五七年九月八日の講演)に
よつて、民衆の生存権にもとづく核兵器廃絶を訴えた。⁽⁴⁾
これらはいずれもSGIの基本的な理念となつている。
戸田城聖を継承し、創価学会の世界的拡大(つまりは
SGI運動)を現実化したのが、池田大作である。彼は、
創価学会による社会変革の原理を以下の言葉に要約し
ている。「一人の人間における偉大な人間革命は、やが
て一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿
命の転換をも可能にする」(同著「人間革命」第一巻「は
じめに」)。結局のところ、創価学会の信仰に目覚めた人
間が自らの行動を通じて現実社会に感化を及ぼし、そ
うした感化の積み重ねとして、世界平和も実現可能と
なる、というのがSGI運動の根本となる理念と言え
る。この「人間革命」の思想では、信仰者個々人の主
体的行動と社会的貢献が強調されており、それによつ
て日蓮の「立正安国」の理念は、より具体的な運動へ
と展開されたことができる。

田中智学は、日蓮仏法を天皇を中心とする国家主義
に結びつけ、日本国家の神聖性を強調し、全世界が日
本の指導に伏すべきことを説いた。彼の「日蓮主義」
は戦前の国家主義・植民地主義を後押しするものとな
り、石原莞爾や北一輝・井上日召らを通じて戦前・戦
中の動向にも少なからぬ影響を与えた。このため、日
蓮を偏狭な国家主義者と見なす見方は現在でも根強い。

一方、牧口常三郎によつて創設された創価教育学会
は、もともと国家主義とは一線を画していた。牧口は
最初の著書『人生地理学』において、国家間の人道的
競争を提唱し、教育者としても国家主義的な教育(たと
えば「教育勅語」)には批判的であつた。戦時中も、狂信
的な天皇崇拜を拒否し、日本が第二次世界大戦を起こ
したことも「謗法」によるものと見なしていた。

このような創価教育学会の姿勢は、戦時中弾圧の対
象となり、組織は壊滅的な打撃を被つた。戦後、創価
教育学会を創価学会として再建した戸田城聖にとつて、
国家主義的な日蓮理解を否定し、日蓮仏法の現代的意
味を明確にすることは重要な課題であつた。彼は仏法

以上、仏教思想なканなく日蓮の思想から、どのよ
うにしてSGI運動が展開してきたかを、おおまかな
がら明らかにできたのではないかと思う。戦前の「日
蓮主義」を反面教師としながら、日蓮の「立正安国」
の理念を「人間革命」の思想によつて具体化したこと
ろにSGI運動が成立したと言えるのではないだろう
か。

注

(1) 「国を失い家を滅せば何れの所にか世を通れん汝須く
一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を禱らん者か」
『立正安国論』、堀日亨編『日蓮大聖人御書全集(以
下、御書と略)』(三一頁)。ここでは、「一身の安堵」
(個人の救済)が「四表の静謐」(世界全体の平和)抜
きにはありえないことが明言されている。

(2) 理想社会の実現について日蓮は次のように述べている。
「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ、
然れば則ち三界は皆仏国なり仏国其れ衰んや十方は悉
く宝土なり宝土何ぞ壊れんや、国に衰微無く土に破壊
無んば身は是れ安全・心は是れ禪定ならん」(『立正安
国論』、『御書』三三二頁)。「天下万民・諸乘一仏乗と成
つて妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経

と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壤を碎かず、代は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顕れん時を各各御覽せよ」(『如説修行抄』、『御書』五〇二頁)。これらの記述は、日蓮にとつて、理想社会の実現が、「正法」の信仰から、おのずから「生じると考えられていたことを示しているように思われる。

(3) 近代の日蓮主義については、大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』(二〇〇一年、法藏館)・松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開』(二〇〇五年、東京大学出版会)参照。

(4) 戦前の日蓮主義思想を検討した松岡幹夫は「いずれの場合においても、宗教的信念から人間の生存を第一に尊重するという思想性は見出せなかつた」(注3前掲書、三一三頁)と述べており、戸田の打ち出した方向性は、明確に戦前の日蓮主義へのアンチテーゼとなっていることが分かる。これは、戦争の惨禍を経験した結果であるとともに、彼が獄中生活で体得したとされる「生命論」による日蓮仏法の再解釈でもある。

(5) この点についての池田の論説は枚挙にいとまがない。たとえば、「わたしが願っていることは、あらゆる分野に活躍していく人物をつくりたい、ということです。そこに宗教の必要性がある。その中から政治に適した人物、教育、文化に適した人物がでてきて、各々が社会に最も貢献できる分野、方向に進む。それぞれがそ

れぞれの分野で社会のため、世界平和のために戦う。こういう方法なんです」(松本清張氏との対談「戦争と貧困はなくせるか」、初出一九六八年。池田大作「私はこう思う」一九六九年、毎日新聞社、一九五一—一九六頁)。

(まえがわ けんいち／東洋哲学研究所研究員)